

素ローカル
なるこ
文庫

高橋敏幸さん
高橋五十子さん
聞き書き

鬼首

— 山と暮らす日々 —

聞き手 西大立目 祥子



素ローカルなご文庫

鬼首 ― 山と暮らす日々

高橋敏幸さん・高橋五十子さん 聞き書き

聞き手 西大立目 祥子

プロフィール …… 4

1 自分のこと、家族のこと …… 6

大所帯で暮らす／通学途中で山学校／学校の先生になる／
兵役で仙台へ／鬼首に戻り教員に

2 住まいと生活 …… 16

茅葺き屋根の大きな家／薪でごはんを炊く／
台所も風呂も湧き水／冬に備える／夜中でも雪下ろし／雪の中の来客

3 地域みんなでやる仕事 …… 27

薪を伐り出す／茅刈りと屋根葺き／草原を焼く、野火入れ／
山を管理するための契約講／祭りで地域を盛り上げる

4 米をつくり、馬を飼う …… 39

家の中で馬を育てる／牛で田畑を耕す／桜が咲いたら種蒔き／
木枯らしの前に稲刈り／大水害で田んぼが流される／

【大森平の開拓】杉の太木を倒す／

水を引き田んぼを開いた／雑穀を蒔く

5 山からいただく恵み …… 61

あたりはブナの森／山の雪が消えたら山菜採り／
倒木からキノコが出てくる／鉄砲かついで猟に出る／ウサギの巻狩り／
クマを仕留める／子どもたちの山遊び／変わる山

6 ものづくりあれこれ …… 80

冬はお膳づくり／天然杉で曲げ輪っばづくり／藁でつくる履物／
着物を仕立てる／出稼ぎに関東へ／漬物づくりの仕事

あとがき …… 92

プロフィール **高橋 敏幸**（たかはしとしゆき）さん

大正15年（1926）〜平成27年（2015）
宮城県鬼首村（現・大崎市鳴子温泉鬼首）
寒湯地区尾ヶ沢に生まれる。尋常小学校高
等科を卒業したあと、数年間、小学校の分
校の教員を勤める。仙台で兵役につき、仙
台空襲を体験。戦後は再び教員になるが
数年で辞め、家業を継ぎ農業に従事した。
近隣の12軒の農家で大森平を開拓。寒湯
区長、軍沢消防団分団長、鳴子町農業委員、
鳴子町民生委員など地域の要職を務めた。
母親から聞いた民話を伝える語り部とし
ても活動した。



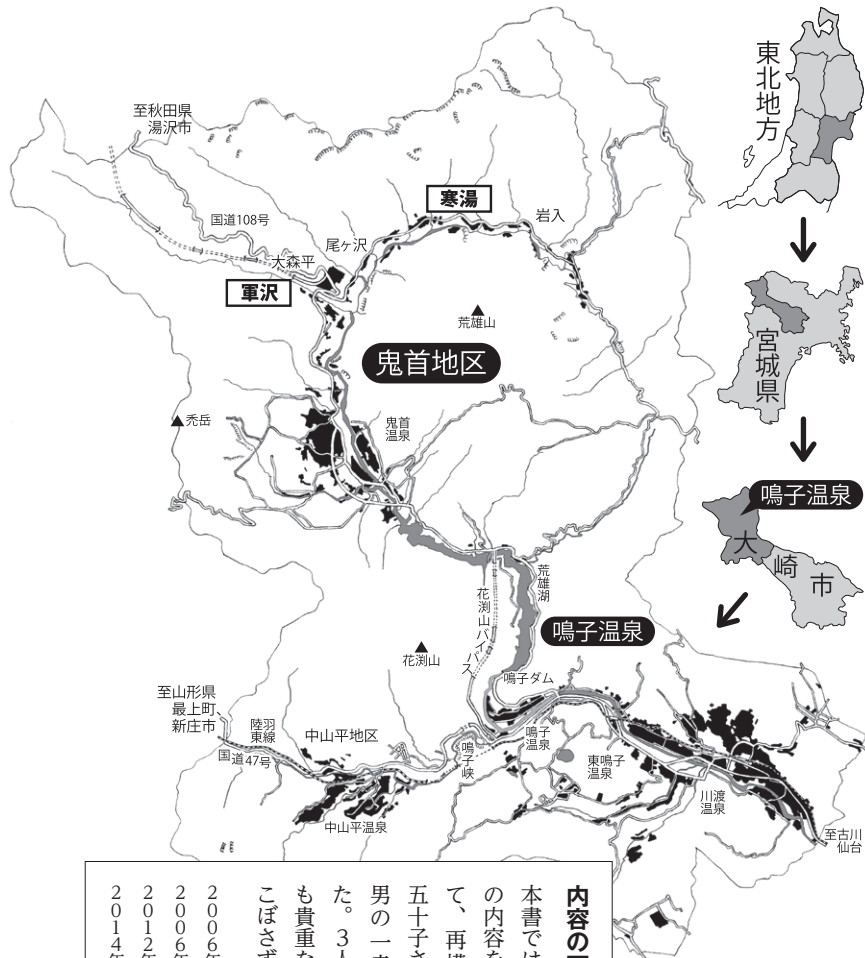
高橋 五十子（たかしいそ）さん

昭和5年（1930）〜令和4年（2022）
宮城県鬼首村（現・大崎市鳴子温泉鬼首）
岩入に生まれる。尋常小学校高等科を卒業
したあと仙台の親戚宅などで働き、東京
では女子挺身隊として任務にあたり東京
大空襲を体験した。昭和24年（1949）、
高橋敏幸さんと結婚、二男二女をもうけ
る。地元では漬物上手として知られ、加工
販売を手がけた。伝統野菜、鬼首菜の栽培
にも熱心だった。



高橋 一幸（たかしかずゆき）さん

昭和25年（1950）〜令和5年（2023）
敏幸さん五十子さんの長男。寒湯地区尾ヶ
沢に生まれる。農業を営みながら、㈱オニ
コウベに勤務、その後、NPO法人鳴子の
米プロジェクト事務局長として活躍した。
寒湯区長、大崎市鳴子地区民生委員児童委
員協議会会長など地区の要職を務めたほ
か、地域づくり活動に尽力した。



内容の再構成と取材日

本書では、7回、8年に及んだ取材
の内容を整理して6つのテーマを立
て、再構成した。取材では、妻の
五十子さんが話したり、ときには長
男の一幸さんが加わることもあっ
た。3人が他界されたいま、どの話
も貴重なものと考え、なるべく取り
こぼさずに生かすことを心がけた。

2006年2月11日／2006年5月6日／
2006年9月26日／2007年1月11日／
2012年2月9日／2013年6月13日／
2014年5月10日

1 自分のこと、家族のこと

大所帯で暮らす

—兄弟は何人だったんですか？

敏幸 兄弟はいっぱいだよ。10人だね。男6人に女4人でなかったかな(笑)。家族は出たり入ったりしてたから。その長男。欠けないでみんな育ったんだ。いまは2人ばり亡くなったけどね。それに両親、祖父^{じい}さんと祖母^{ばあ}さん。

五十子 嫁に来たときは、何とまあ14人家族。よく逃げて行かなかったね(笑)。一番末の弟とうちの長男が同じ年なんだでば(笑)。12月生まれと1月生まれで、おんつあま(叔父)の方が一ヶ月だけ年上なの(笑)。まあ、こんな一抱えもあるような大きな釜で、お祖母さんが朝に5升ごはん炊くの。それ、みんな食うの(笑)。子どもたち先に食って、嫁ごはあとで食って。

敏幸 よく我慢してたもんだ。

五十子 ほんとだ。よくいだ(笑)。昭和24年に、20歳でお嫁に来たの。20歳では嫁ごにはまだ早いなあ。だまさったっていうの。この奥の岩^{がにやう}入で生まれて、小学校は岩入分校。娘のころはいつも出はって歩いてた。仙台に連れて行っておばさんの面倒みたり、子どもたちみたり。父親が役場にいたったから、そこに泊まってごはん炊きたり。東京には挺身隊で1年以上いたんだね。

昔は難儀したけど、いまは呑気に暮らしてる。都会にいたら、こんなに呑気にしてらんない。実家はもうねえのがすと。古川にいて、そこから千葉に移ってしまっ。兄弟たちもみんな東京の方さ、行ったから。妹など東京で美容師してんの。

—何代前から鬼首に住んでるんですか？

敏幸 俺で3代目か。

五十子 サクエモンじんつあんの時代からだべっちゃ。

敏幸 サクエモンという人は、栗原から婿にきたんだ。

五十子 婿とった祖母ちゃんは、キヨシ。近くの生まれで、えらい美人でね、きれいな祖母ちゃんだった。私がお嫁にきたときは、いたの。婿とったんだけど、家督が生まれたからその家は

出はったんだと。そして北海道さ行って来たっていつてたんでない？

敏幸 北海道の白糠村しろぬかにいたんだな。

五十子 一生懸命働いてお金貯めて、この土地買ったんだと。ここは侍の家だったとこである
まり良い土地ではないって。

通学途中で山学校

— 小学校は？

敏幸 学校は6年生までは近くの鬼首小学校尾ヶ沢分校に行っただけども、小学校6年卒業
すると、高等科は鬼首尋常高等小学校。高等科は遠くて原台はらだいの支所があつとこにあったんだ。

朝暗いうちに出て松明つけて歩くんだが、1時間半から2時間はかかるんだね。夏なんかあ
んまり暑いと、途中、山で遊んで川で泳いで、腹へるから弁当食っちゃう（笑）。近くの店から
なんだりかんだり買って歩いて行っただった。

五十子 原台さは、スキーで行ったもんださ。

敏幸 冬はスキーで行ったの。その方が歩くよりは早い。でも大雪なると、とてもとてもスキー
は効かねえわね。男の人たちはね、冬の間は寄宿舎に泊まってた。1週間に1度、家に帰って

くんの。

五十子 女の人たちは親戚の家だのに泊まって。週にいつぺんは家に戻って、食うものの背
負って行かないと。米だのね。

敏幸 小学校と高等科、8年間、無欠席だったよ。

— 子どものころ、農作業の手伝いはしましたか？

敏幸 あんまり記憶はないけども。

五十子 させらったんでねえの。

— 風呂炊きとか、水くみとか？

敏幸 それはバアバがいたから。薪運びとかやったかな。

学校の先生になる

— 学校出てからは？

敏幸 15歳で高等小学校卒業して、昭和17年の秋、17歳のとき学校教員になったの、小学校の。サクエモン祖父さんがこの尾ヶ沢分校の学務員してたんだお。いまのPTA会長みたいなもんだね。そのころ家にいて県の視察があったときに、先生になりたいんだったら採用するからということになった。最初に採用になったのが、加美郡の漆沢分校だった。いまはダムになったとこ。そのころは100人ぐれえ子どもがいて1年生から3年生まで教えた。学校は教員2人、2学級。

―長男で家にいて農作業とかあったと思うんですけど、家を離れることにお父さんたちは賛成だったんですか？

敏幸 反対だったの(笑)。

―お祖父さんがいいよっていったんですか？

敏幸 なんだね。学校のこと夢中になって世話していたんだお。

五十子 えらい元気のいい、しっかりした人だった。

敏幸 漆沢分校に3年ばりいて、ここの尾ヶ沢分校に戻ってきたの。あと、この奥に硫黄鉱山

があつて、冬の間子どもたち通うの大変だから季節分校の北滝分校というのがあつて、そこにもちよつといたんだね。教え子はこの辺にもいるよ。

五十子 あの頃は、鉱山あつて人いっぱいいたんだね。

―硫黄を掘る人たちの家族がいたんですね。

五十子 北滝分校と荒湯分校ね。硫黄は荒湯の方で、北滝は材木だったね。部落があつたわけだ。よそから来た人たちで、いろんな人が来てたんだね。

兵役で仙台へ

敏幸 尾ヶ沢分校にいる間に軍隊に行ったの。昭和19年に。20歳っていうと兵隊検査があつて。兵隊に行く前の年、講つくって三山参りに行ったな。朝早く暗い内に出て、月山にも登った。入隊したのは仙台の川内。第二師団でなく、新潟高田の小隊が置かれて、俺は山砲隊だった。いま思い出すと、仙台の西公園の広瀬川をはさんで橋渡った向い側、あそこにいだったの。毎日爆弾背負って、「戦車来たら下にもぐれ」って、そればかり訓練したね。自爆テロさ。特攻隊だ。何もかもや、空襲で焼けて。

―仙台空襲あったのは夜中ですよ。

敏幸 前の日ね、空襲あったときはここさ逃げるんだと逃げ方練習してたの。次の晩、ダダダグダーと空襲だ。みな、防空壕さ入っぺと急いで。戦友も自分も荷物を入れらんなくていて入らなくて幸いだった。入った人はみな窒息して蠟人形のようになって死んでしまった。

―逃げたんですか？

敏幸 亀岡八幡宮まで川内を走ったの。橋に人あふれて、「兵隊さん火消してけらい」といわれたってや、逃げるのが精一杯。

五十子 私は東京にいたんだけど、落とされたのは焼夷弾だったの。

敏幸 焼夷弾だ。そいつに爆弾まざってきた。そのときいっしょにいた兵隊で亡くなった人もいたの。亡くなった兵隊さん、両親も兄弟も家も何もない人だったおな。誰も迎えに来る人もいねがら、新しいふんどし持ってた人たち出して、骨包んで首から下げて、そうしてみんなして終戦まで安置したんだ。

亀岡八幡宮は、うんと立派だったの。めらめらとみんな焼けてしまつて。もっと山奥さ逃げつぺって、山さ逃げて行つたの。うちさ逃げつぺと思つても、逃げたら捕まつて殺さつてしまう。

そしてつらつら夜が明けたころ亀岡八幡宮に行つたら、死んでた人たちいたんだっけ。「いま憲兵来て見て、死んでるからもうだめだ、手つけるなつていつてた」っていわれて。俺は運よかったんだ。

五十子 東京もどんどんと爆撃されて、焼けた人を車で運んできて、穴掘つて埋めて油かけて焼いたんだからね。

敏幸 軍隊は次の朝の昼過ぎに、どこで炊いてきたものだか、赤飯を持ってきたんだっけ。赤い米さ。小豆飯かと思つて食つたっけ、喉通つていかねえの。コーリヤンだお。つらかつたなあ。そして昼過ぎから行軍だ。どこさ行くんだと思つたっけ、七北田の小学校。婦人会の女の人たちが握ってくれた真つ白なおにぎり、2つぐらいずつ食わせらつて、みんなわあわあ泣いたっけね、ありがたいて。みんな野郎っこめらだもの。何にも食わせらんねえで歩かせらつて。そのころの七北田街道は途中で家1軒か2軒しかなかったね。あの見返り坂つて、昔罪人が処刑されたあたりを通つて。

鬼首に戻り教員に

―終戦になつてここに帰つてきたんですね。

敏幸 帰ってきて、北滝分校の先生になったんだ。でもそのうち、一緒に働いてた先生が仙台の師範学校を卒業した人で、共産党員だということで校長が来ていっしょに辞めさせられてしまった。その人に2年も3年もついてたから。共産党員かどうかなんてわかるもんでね。まだ子どもだったお。

教員の道に入ってからつくづく考えたの。資格がないと駄目だしさ。准訓導の資格は取ったの。でも、訓導の資格取るのは、少しばかりの苦勞でねえもの。高等小学校の尋常科卒業したばかりでは、とてもじゃないが。歴史から地理から勉強しないと。一番つらいのは数学。だから、いつまでも教員やるもんでないと思って、北滝分校でやめたの。あそこは雪が消えたら閉鎖で、季節分校だから楽だったんだお。

それで百姓の道さ入ったわけさ。父親には、「やめてけろ」って、ずっといわれたの。両親には反対されたの。「百姓やってくれ」って。でも祖父さんが学校のこと熱心にやってたからね。母は喜んだの。男兄弟いたけど駄目だったね。昔の長男はかわいそうだった。

―戻ってこられたときは、家にはお祖父さん、お祖母さん、お母さん、お父さんがいらしたんですか？

敏幸 んだね。そのうちに兄弟は東京で就職したりして。ここと、開拓した大森平に家があっ

たから、別々にいて。

五十子 私が嫁にきてから、女の人も1人静岡、1人東京行ったりして。

―鬼首から北海道へ行ったり東京へ行ったり、けっこう外に出ていますね。

五十子 仕事ねえから。

―それからずっと鬼首に暮らしてきたんですね。

敏幸 やはり、自分の生まれたところは一番だ。

2 住まいと生活

茅葺^{かやぶ}き屋根の大きな家

—もとの家は茅葺き屋根ですか？

五十子 茅葺き屋根の家を、キヨシ祖母さんとサクエモン祖父さんが建てたんだと。

敏幸 写真ねえがわ？

五十子 座敷あって、中間あって、台所なんて20畳もあった。土間もあるし、えらい広いもんだったの。

敏幸 台所は板張りで、土間があつて、すぐ馬いて。

五十子 「こんにちは—」ってお客さん来つと、馬が顔出すんだっちゃ。

—馬は何頭いたんですか？

敏幸 うちは1頭だけ。玄関入るとすぐ土間になって、その横が馬小屋。ひとつ屋根の下に、みな住んでたんだお。顔見えつとこにいれば、様子わかつてすぐ水飲ませたりできた。親密感っていうかね。畜生といえども性^{しょう}があるからね。あと「こんにちは」って入ると、頭の上に鶏いたの。玄関の上のところに鶏の止まり木あつて、鶏は昼間は外にいるけども、夜はそこに上がって寝んだ。

五十子 昼間は外で遊んでんの。そして夜になると、みな自分で上がつてくの。そして、朝になつと暗いうちから「コケコッコ—」って叫ぶの。そういうの聞いたことねがったからね。うるせくつて。いまは笑つてけつとも、嫁ごにきたころは大変だった。そして卵なんか、そこら中になして歩くの。草なんかいっぱいあるから、そういうとこに産むの。ほいづを子どもら盗んで食うんだっちゃ。「なんだか最近卵なさねえな」っていってると、犯人はいるんだね(笑)。

—茅葺きは寒いですか？

五十子 がらんとしてるからね。天井も高いし。

敏幸 囲炉裏あつて、自在鉤下がつて。

五十子 いまと違って炉端だから、煙いの。灰は上がるし、よく病気になったりしないで暮らしてたもんだ。

敏幸 みなトラホームになった。目、真っ赤になつては。薪は長いのを囲炉裏にくべたね。囲炉裏で薪を燃やせば灰出るわけだから、夜はボツコギ（太い木）をくべて、あぶねえから燃えないように灰かぶせておくと、朝までもった。火、消さねえで、夜に納豆寝せることもあったね。五十子 筵かぶせたりして、じんつあん、納豆づくりやってるもんだったな。大豆煮て、苞に入れて。

敏幸 火箸でつついて糸をみて。

五十子 いまのように納豆菌入れるわけねえから、そう糸は引かないんだけど、火箸でつついて糸引くかどうかみるんだっちゃ。糸がついてきたら、でき上がり。2日ぐらいかかったね。あんまりあったかいと、おしっこ臭くなって食えねえのは（笑）。それでも食ったけど（笑）。

薪でごはんを炊く

—敏幸さんが子供のころは、白米食べられたんですか？

敏幸 ああ、食べてたね。

五十子 カテに麦、入れたんでねえの？

敏幸 麦だの、フキだの、馬鈴薯入れて。終戦当時はな。

—子どものときはどうだったですか？

五十子 子どものころは、そんなの入れてなかったんでねえ？

敏幸 麦飯はずいぶん食ったな。ごはんといっしょに炊く。

五十子 米だつてあんまり出ねかったし。寒いとこだからね。肥料も入れねし。

—ごはんは竈で炊いたんですか？

敏幸 さまざまだったんじゃないかな。竈は使わないで、鍋でごはん炊いてた家もあった。

—竈の燃料は？

五十子 薪で。火つけるときは杉っ葉使ったね。杉の葉集めて、火つけて。

敏幸 杉っ葉は、居久根にあんの。居久根にあったのは杉、ヒバ。ここいらは雪多いから柿は

折れてだめ。イチジクもだめ。実がなるのは栗ぐらいだ。栗は山にいっぱいある。胡桃^{クルミ}も。でもいまは山の胡桃も採らなくなったわな。

五十子 サイカチのえらい太い木があつて、その実で頭洗ったね。髪が真っ黒につやつやとなんの。居久根は一度雷が落ちて大変なことになって、そのあと伐ってしまったのわ。

――薪の準備は？

敏幸 昔は共同で山から木伐り出して準備したの。いまは業者から買ってそれ細かく切断して、ストーブに焚いてんだ。準備は春のうちにだな。そうだねえ、田植えが終わったころだ。昔は、薪は川から流れてくんのもあつた。一年分となったらずいぶんな数だからね。川に鉤^{カギ}持^{カギ}つていて拾い集めて、それ切つて焚いたりもした。

――茅葺き屋根の前の家はいつ壊したんですか？

敏幸 50年くらい前か。茶の間の戸は、前の家のもの。金あれば、もっと立派な家建てられたのにな。鬼首の中でも壊したの早い方。あのころは江戸時代に建った家が多かった。茅屋根はいまもうほとんど残つてねえんでねか。

台所も風呂も湧き水

――ここは井戸はないんですか？

敏幸 うちには湧き水だね。電気でモーター回して。この辺はいまも水道ないんだ。

五十子 うちはお茶もお風呂も全部湧き水。井戸はないのね。隣の家は井戸だね。専門家たのんで、何メートルも掘つて。うちは自然の水。

敏幸 家の裏の方の太い杉の木の下からボコボコ水が湧いてんだ。茅屋根だったころは、家に水引いてたの。台所には水舟あつて、イワナまで、もうごちゃごちゃ飛び跳ねながら入つてくんだ。全部かけ流しだ。

五十子 そうそう、茅葺きのころは堰つくつて家に引き込んで。夏はいいけど冬になつと雪が堰に積もつて流れなくなつて、そうなつと結局嫁が行かなくてなんね。なんぼ難儀したか。若かったから雪こいで、やったけどね。

敏幸 昔は水舟に流しっぱなしにしてたが、いまはそんなことはねえの。河川改修されて川床が低くなつたし、水の量が少なえし。いまはタンクに落として、モーターで蛇口から出るようにしてる。源泉のところはときどき見に行つてね。うちは湧いた水を流してすぐ使つてるが、そういう家ばかりでないから共同で助成金もらつて水道にした方がいいという話は何度も出たの。

でも、なかなかまとまらなかった。水は自分の土地に湧いてるわけではなくても、自由に使っていいんだ。「使ってわがんね」と、とがめる人はいないんだね。

—水の検査はするんですか？

敏幸 自分で保健所持って行って検査してもらうんだね。

五十子 うちの湧き水、古川の食堂やってる人、タンクいっぱい持ってきて汲んでいったことあったよ。

—茅葺きのときは、トイレもお風呂も外ですか？

五十子 お風呂は中。トイレも離れていたけど、屋根かかっているとこ歩いていけた。まだ楽だったね。

冬に備える

—鬼首はいつごろから暖房入れるんですか？

敏幸 寒ければ、いつでも、9月ごろか。朝露が冷たくなつから。雪囲いも10月末ごろにはやるね。

—紅葉のころは、のんびりできませんね。もう何年も見てるでしょうけど。

敏幸 何年見たって、美しいものは美しい。紅葉は見とれるね。「稲早く刈って、栗駒山さ紅葉見に行くべ」なんていつてるお。寒さがきびしくなると赤くなるね、黄色から赤になる。

—そのころには初雪が来ますね。

敏幸 雪が降ると、雪との戦いの始まりだね。

—敏幸さんにとって、秋はいつからいつまでですか？

敏幸 9月は秋だね、稲刈り始まれば秋。荒雄川神社のお祭りのころ。いまはバスが回ってくるの。

—11月は？

敏幸 冬の始まりだね。

夜中でも雪下ろし

—冬は雪下ろしが大変でしょうね。

敏幸 昔はもっと雪積もったね。もつつもつつ茅屋根に雪積もってくつと、ミシツミシツと音たてるようになってくんだ。茅屋根っていうのは、釘使ってねえで結わえてあるだけ。これ以上ためてはつぶれる、と感覚でわかん。そうになったら、夜中に起きてカンテラつけて雪下ろし。家中でやったもんだね。上から下ろしても、軒の下につかえるくらいにいっぱいになってしまう。雪でつぶれた家は見たことねえけど。

—雪下ろしの道具は？

五十子 サツケっていう長い雪べら使って雪下ろししたの。子どもたちも3年生くらいになると屋根に上がって手伝うようになった。オレより力あんの。この人が出稼ぎでいなかったときも、雪落として助けてくれてね。じんつあん、ばんつあんは、しねがった。

敏幸 雪下ろししないと、家がつぶれんのさ。茅葺きのときは、葺き替えした新しい茅のときは落ちるけど、古くなると雪がへばりついて落ちなくなんだお。サツケはこの天井さぶつかるくらい柄が長くて、それでつついて下ろす。昔は一本の木でつくったもんだ。シナノキ、カツラの木を使った。割ってつくったのは、軽くて丈夫。いまでも「軽くていい」と使ってる人がいんだ。雪はぬかってわがんね。沈まねようにカンジキ履く。屋根にもカンジキ履いて上って、サツケで下ろした。昔の人の知恵だべ。雪下ろしときは、濡れないようにケラ（藁などですくする雨具）を着る人もいた。いまでもたまにいます。ケラをつくる職人もいたんだ。

10日ばかり前、雪下ろししてトタン屋根の上からたたき落ちたんだ。軒端のところにべろりとしてしまって。息はつけねえし、携帯で家に「落ちた」って電話して。腰痛くて、町立病院でレントゲンとってもらったんだお。「どこもヒビは入ってない」っていわれてね。ああ、いがったな。

雪の中の来客

—雪でも行き来はあるんですか？

敏幸 ここはすぐそこが秋田だから、昔は秋田からの郵便物は、配達夫が峠で郵便物をやり取

りしてたんだ。

五十子 いまはみな平らだけど、ここの坂も嫁にきたころは傾斜してて、堅雪になつと子どもたちみんなスキーに乗ってくるもんだった。春になつと固くなつて歩いてもぬかなくなる。みんなでそんなことして遊んでたんだよ。

敏幸 11月から3月までは、雪。

五十子 お客さんはしょっちゅう来てね、火にあたつて語つて、酒こ飲んでよろこんで帰つてくの(笑)。

敏幸 泊まり客も多かったんだお。車ないころは、鬼首の中だつて雪になれば帰るの大変だったからな。

五十子 遊びにきてごはん食べて、泊まるんだね。んだから、ごつとお、したもんだっちゃ。いまは朝6時ごろ起きてストーブに薪入れて火焚いて、お湯沸かすの。

敏幸 ストーブにくべる薪は、木小屋からソリで運んでくんた。

五十子 煙突から煙すーっと上がつてつと、「いだのゝ？」ってお客さんが来んの。

3 地域みんなでやる仕事

薪を伐り出す

—薪は山から伐り出してきたんですね。

敏幸 山の木の払い下げを受けつと1週間くらい山に入ったんだ。業者(山師)が営林署と契約してて、決められた区域が払い下げになつと、鬼首の人を使って1立方なんぼで伐り出した。伐つて、指定の場所まで運んできてなんぼ。それで精算した。差額が山師のもうけになんの。山師も鬼首の人だったね。

—冬の作業ですか？

敏幸 木伐りは冬なの。奥の山から木を伐り出すから、馬ソリでしか運べね。雪がないと駄目

なんだ。だから冬に伐んの。上から落としてきて、まとめて運ぶんだね。木は夏に伐ると木の表面の皮がペカペカとれっちゃう。冬だと皮はくっついたまんまで、残ったところからキノコが出てくんだ。うまくできてたもんだ。

薪運びは現地で3尺ぐらいに伐って、3月の雪が消えるちょっと前に運んできた。ソリで途中まで運んできて、崖のようなどこは手ですべらせて落として、あとは引っ張ってくっか背負ってくっか、場所によりけりだ。これは共同でやる人もいたし、個人でやる人もいてさまざまだったな。

一本ゾリ（手ゾリ）を伝えたのは、岐阜県から来た人たちだ。ボートのような格好で、この辺の人たちは見たことねえソリだった。本体に穴が空いてて、そこに長い柄つけて、柄であやつりながら急斜面をズブーッと下りてくんの。ジグザグに、どこでもかわまず下りてこれんだ。道路づくりなんかは楽になったんだお。鳴子にあつという間に普及した。岐阜県から大量に入ってきて、1軒の家に1つか2つ、いまもまだ残ってるな。おら家にもまだあるよ。

茅刈^{カヤ}りと屋根葺き

—茅葺き屋根の茅も山からですか？

敏幸 屋根に使う茅は山に生えるもの。河原に生える葦^{ヨシ}の方が長持ちはすつけども。昔は茅屋根の家が多かったけど、茅刈りも屋根の葺き替えも共同でやったもんだ。いまのように金出して頼むんでは無理さ。契約講っていう、地域の20〜30数軒の家が入る組織があつたんだ。相互扶助精神の徹底したものだな。

共同の山があつて、「今日は天気がいいから、茅刈りすつから頼んます」っていわれると、みんなで山に行つて鎌で茅刈ったんだ。刈るのは秋で、家から必ず1人は出たね。それをまとめて山のように重ねておいて、3月ごろ、雪が残っているうちに家からソリ持つてつて、みんなの家まで運んでくんだ。雪が固まつてつから、凹みがあつても田んぼの上でもソリで運んでこれんのさ。

—屋根葺きも共同作業ですか？

敏幸 茅屋根の葺き替えは丸替えるものではねえの。屋根葺きは今年はこっちの家、この次はそっちの家という具合に割当てて、1年に1軒ぐらいずつ葺いたんだ。いっぺんにはとつてもいがねの。相当、茅を使うもんだからね。今年はこの家と決めたら、傷んでるところ、大体3分の1くらい葺き替える。ひどいところを直すんだね。作業は2、3日かかって「今日2人要るとや、明日は3人だ」と段取りして、適当に人が出て、茅葺き職人を頼むこともあつた。職人

は栗原の方に多かったね。何年もかかって一軒一軒変わるもんだったお。お昼には、カボチャの煮付けから何からうまいものいっぱい持ってって、みんなでどぶろく飲んで、それは楽しいものだったよ。

草原を焼く、野火入れ

—今日は野火入れを見られると思ってましたが、天候で中止になってしまいました。

敏幸 いまだにやってるんだね。昔は馬や牛がいたから、食べさせる草を育てんのに、草原を焼く野火入れは必要だったんだ。ここに5人、そっちに10人と人を配置して「さあ、火つけ」と」と合図して焼いてくんた。ダダーッと燃えていって、まあ勇壮なもんだ、火入れは。やるのは雪の消えたあと。真っ黒になるくらい山焼くと、虫が死んでいい草が出てくんた。

五十子 いまは馬はいないけど、外からきたワラビ採りの人たちなんかタバコ投げると山火事になってしまうから、その前にね。

—焼く場所というのは？ 共同の山があるんですか？

五十子 尾ヶ沢と寒湯ぬるゆの共同の山。

—焼いたあとに、何か植えるんですか？

五十子 ううん。そのまま。

—もとはそこに馬放したりしたんですね。

五十子 馬さ食わせるいい萩はぎが出てくるから。

一幸 この奥の岩入の方も、いまの時期になると順繰りに野焼きがあっただんですよ。

五十子 焼くと、いいワラビが出てくんの。岩入だとワラビがいっぱい出るとこ、3カ所ぐらいあったんだな。

—敏幸さんは「野火入れ」といつてるけど、一幸さんは「野焼き」といいいますね。

一幸 ニュースだと「野焼き」って報道しているね。「野火つけ」ともいうね。

— どのような手順でやるんですか？ 準備がありますよね。

一幸 まず、草原の縁とか、燃え広がらないように防火線、2メートルくらいの幅で通していくわけ。

五十子 通したところから、ぐりーっと火をつけてくるわけ。

敏幸 そうすると、火、お空つん抜けるくらい舞い上がって。

一幸 とにかく燃えるときはすごい勢いだから。バリバリバリという音がするから。

敏幸 ああ、ダダーンと火が上がってな。

五十子 野火入れんときは、喧嘩（笑）。「おっかねがらそんなに火つけんな」とか、「ほんなごといったって火つけなくてわがんね」とかねえ（笑）。それで、ダダダとあたりにつけてくの。火つけると竜巻が起きんのね。必ず起きっからさ。おら家の裏さ燃え移ったこともあったの。「ああ、駄目だ駄目だ、杉さ付いたら終わりだわ」ってねえ。そのうちに風の合間見て、消したけつともね。ほんとにおっかね事ばりしてた（笑）。

— 自然に消えるんですか？

一幸 いや、消えない。古川宮林署から背囊を、背中に背負うタンク借りてくるんです。ここ

はいのう

15年ぐらいはね、農薬散布するスピードスプレイヤーみたいなのを軽トラックに積んで100メートルぐらいのホースつないで、危ないところは消していくから。だから比較的楽になったの。

— 今日中止は、何時決定だったんですか？

一幸 5時半だね。4時半に起きて現場行ってみて、ああこれは土とか濡れててだめだなあ、と。ひとまずメールだけ打って、契約講の取りまとめ役の人のところ行って「起きたすか？」といったら、「まだ、外に出てねえ」と（笑）。「今日は中止にしましょうわ」といって。連絡係の人いるので伝えてと頼んだの。じゃないと、仙台とか古川から来る人もいて、みんな家出ちゃうからね。

敏幸 警察から消防から、みな連絡しなくてねえから。

五十子 今日だめだから、もう終わりすかわ？

一幸 うん、今年は、やんないわ。

— 今日は何人くらいくる予定だったんですか？

一幸 45人くらい。野火入れは、消防署からの指導があるのね。「この面積なら何人配置しなさい」と。火が燃え広がったときに消火できないとね。だから人が足りないと大変なの。



野火入れ。草を刈って防火帯(手前)をつくり、火をつける。契約講の講員の人たちが火の向きに注意しながら草原に散らばり、金属の熊手でまんべんなく燃えるよう枯れ草をならしていく。



着火すると炎はなめるように草原に広がり、立木まで飲み込んでいく。勢いが増すと竜巻が起きることもあり、危険と隣合わせの作業だ。黒い部分が燃えた跡。上下とも2018年5月。

—もし、今日やってたとしたら、9時に火が入って何時に終わるんですか？

一幸 そうだなあ、大体11時半くらいだね。そして、すぐには解散できないの。また、どこで燃えるか、風で火がまた起きるかわからないから。だから1時間とか2時間とか、みな待機してんの。

—お昼ごはんはどうするんですか？

一幸 おにぎりとか持ってきてますよ。みんな牧草の上で待機してるわけさ。

—昔、馬や牛がいたところは、雨でもやったものなんですか？

一幸 いや、雨降るとだめ。茅が湿っちゃって、いくらマッチで火つけてもつかないから。雨降るとね、火つけられるようになるのは3日目ぐらいかな。雨の量にもよるけどね。

五十子 昔は必ずやってたんでねえの。んでねど、馬に食わせるものなくなるから。

一幸 結局昔はさ、サラリーマンいないから、今日雨降っても3日後とかに必ずやれたのよ。いまは土日じゃないとだめだし、勤務の関係でゴールデンウィークのときはだめとか、いろ

いろだからね。

山を管理するための契約講^{けいやくこう}

— 契約講に入っている人たちが共同で山を維持しているんですね？

一幸 いまは岩入東部、岩入西部、寒湯、
軍沢^{いくさみさわ}、田野、原台、川東、小向と、みな集落^{いくさみさわ}ごとにあつたんですよ。

— この契約講は？

五十子 尾ヶ沢契約講。何軒かな、ここ？

一幸 10何軒か。

敏幸 部落は軒数が違うから、30軒以上のところは、同じ部落内でも3つくらいに分かれてたな。契約講には山林とかの財産があつたから、その管理もあんの。杉山は、間伐しねえといい杉は育たない。山の杉をみんな育てて売って、経費を除いたものをみんなで分けるわけ。分け前がどつさりあればいんだけども(笑)。

一幸 それに契約講は、正講員と准講員とあるんですよ。地権者が正講員、上物(樹木)だけ持つてるのが准講員。いまは仙台に行ったり、県外に出てる人もいてね。そして分筆ごとにみな分かれてるんですよ、権利のある人たちがね。上物(樹木)を処分するとき、まあ、いまは木代というのはゼロに等しいような価値しかないんだけど、財産を分けるときに、共同作業に出てこない人たちにも同等に財産を分割しなければならいでしょ。50人いれば50分の1ずつ。だから、いまは遠くにいて共同作業に出てこれない人たちからは「出遅れ」っていうのをもらうの。いま6千円。

五十子 昔は歳とって出らんなくなったりしたときは、出遅れはとらなかつたのね。

一幸 いまはみな離れてるからね。「財産処分したいから、契約講で買ってくれ」というのが、2、3きてんのね。1件は処理したんだけど、これも問題あんのね。これまで50分の1ずつ持っていたのを、49分の1ずつに全部登記変えしなくちゃいけないから。だから、大変なんです。

敏幸 登記料が大したものなんだお。だから、生まれた土地に残る人たちがえらいひどいんだ。一幸 離れている人たちだと、登記の名義変更していない人たちもいて、もう孫の代になつていたりすると調べられない。

祭りで地域を盛り上げる

―地元のお祭りも地域の方々でやるんですか？ここから一番近い神社は？

敏幸　すぐそこ。馬頭観音。あとちょっと登っていくと、八坂神社。台風で木が倒れてしまった。神社がつぶされてしまうんで、すっかり伐っちゃった。馬頭観音のお祭りは9月17日。お祭りのときは興行師をたのんだり、栗原からお神楽も呼んでんだ。みんなでしょっちゅう相談してんの。契約講更新するのがあるから、そいつの総会。部落の財産、共有地、その相談だお。

4 米をつくり、馬を飼う

家の中で馬を育てる

―馬はいつごろ飼ってたんですか？

敏幸　昔は農家には1頭か2頭、馬飼ってるもんだったお。家の中で飼ってたんだ。田起こしから何から農耕馬に使ってたの。いまの耕運機みたいなヘラのついた馬耕っていうものを馬に引かせて。

前は軍馬育てったの。戦争当時は軍馬が必要で鳴子には陸軍の軍馬補充部があったから、馬市に出すといい血統のは軍に買上げらったんだ。あとは農耕馬だ。売れて金になったから、仔馬とんのに繁殖用の馬を飼ってたもんだお。馬市に連れてくのは、大体2歳と制限されてるわけ。五十子　2歳になると、川渡の馬市に持っていくものだった。こっから引っ張っていくんだっ

たの。夕方出て、夜歩いてくの。

敏幸 ここで種付けして生まれたのを育てて連れてったの。市にいけばほとんど売れたね。馬市ときは、夕飯を食べたあと爪痛めねように草鞋をはかせて、松明をつけたりカンテラつけて引っ張って行ったんだ。鬼首の人たちはみんなそうしたもんだ。

—鬼首から鳴子に抜ける小豆坂という古道があったそうですが。

敏幸 小豆坂など、馬はとっても越えらんねえもの、急で。

五十子 ダムのわきの道路、隧道。いまは新しい道路できたからもう歩かないけど。

敏幸 あの道は工兵隊来てやったつうんだな。夜に出んのは、鬼首の馬は車見たことねえから、車なんかきたら驚いてぶっ飛んで行っちゃう。怪我したりしたら大変だから。大畑あたりでちらほら夜明けがくる。鳴子大橋に近くの国立病院があったとこ、あのへんでひと休みして川渡さ行つたの。馬市はそっちこちから馬が何十頭と集まってきて、お祭りだねえ。出せば売れて家計を助けるものになったから、みんな夢中になったんだ。馬喰^{ばく}が買いにきて、馬小屋を見て歩くんた。父と母が誰かという血統も大事。軍に買い上げとなつと、三日三晩ご祝儀ぶるまい。

五十子 戦争に持って行がったんでないの、買われて。

—鬼首は、明治天皇の御料馬だった「金華山号」を出してるんですね。

敏幸 ここで生まれつと頭離れねえの、金華山号のことは。出したのはすぐ近くの家だ。宮内省が来て買い上げたんだ。どこの馬だということになったら、鬼首だった。鬼首には、伊達政宗がローマに遣わした支倉常長が馬を持ってきて、ここに隠したという伝説もあんの。アラブ馬だったのかな。

—野火入れしたあと出てくる萩^{はぎ}を馬に食べさせたそうですね。

敏幸 契約講に入ってる人たちが、そこに家の馬を放したの。

五十子 あと牛も。そして夕方、子どもが牛上げに行かせらつて、遅いと叱られて。牛、逃げで歩つてなあ(笑)。

敏幸 小学校5、6年くらいまで、馬、捕まえさせさ行つた。

—毎日、朝に放しに行つて、夕方上げてくるんですか？ 子どもの仕事なんですね。

敏幸 そう。

五十子 ほして牛なんかはさ、かかってくんの(笑)。

敏幸 小学生のころから裸馬に乗って、カッカッカと馬といっしょになって走って。そして、河原さも馬、連れて行ったりした。

―馬は何頭も放されてるんですね。ケンカなんかしないんですか？

五十子 食うものがあつから、ケンカなんかしない。気にいらない馬のそばさは行がねおね。

敏幸 あと昔は、夜明け前から馬にやる草を刈りにいったの。5時では遅い。刈って丸ったやつをやセウマ(木の枠に藁縄などを巻いた背負子)に3つぐらい頭より高く結わいつけてきて、朝昼晩に馬に食わせたもんだお。何キロあったべな。ヤセウマは自分の家をつくった。放牧すると、秋、雪降るころになると、ものすごく肥えてくる。

牛で田畑を耕す

―馬を飼っていたのはいつごろまで？

敏幸 戦争が終わってからは、牛に変えたね。一斉に、馬はいなくなったのわ。今も馬飼って

いる人は競馬馬だね。

―牛と馬といっしょに飼ってたこともあるんですか？

五十子 牛の時代には馬はいなくなったね。

敏幸 重機がわりだから。機械がないから田畑耕すのにも牛を使っていたね。冬に鳴子まで牛引って歩いて炭を運んだことがあったけな。鼻取りっていつて、女の人が牛の鼻先引って張って、田んぼの代掻きなんかもやってたの。農耕用と売ると両方だね。

金とるばっかりでなくて、馬や牛を飼うのは田や畑に入れる堆肥を取る目的もあったの。2頭飼ってれば、何とかあった。牛の厩の中から牛糞を出して、敷地内に運んで来んだ。堆肥は雪が消える前に小さなソリで田んぼ、畑まで運んだ。女の人たちの仕事だったね。ソリの上に、竹の簀子すのこを編んで乗つけてね、その上に堆肥を乗せて毎日運ぶんだ。昼は豆ごの焼き飯と黄粉をまぶしたおにぎり食べんの。海苔なんてねえから。

―牛も仔牛とるんですか？

敏幸 そう。牛は馬と違って発情する時期が違う。馬は春だけど、牛はいつてことがない。

―育てたら、牛も市に出すんですか？

敏幸 牛市は毎月あんの、宮城県で一カ所、小牛田で。もとは川渡で開かれてたんだけど。いまは、7月と8月に、生後10ヶ月で出すんだ。人の扱い、血統で大きさは違うね。血統いいと高く売れんの。8月に出したのは53万5千円だったか、出せば売れるね。肉牛だよ。

―飼っていて情は移らないですか？

敏幸 そいつは移るね。牛も放牧すんだ。今年もあと2、3日で放牧するよ。

五十子 あとは昔は緬羊めんようも飼ってたことあんの。

―原毛売ったんですか？

敏幸 工場さ、売ったの。

五十子 それで背広をつくったり、頭にかぶるのをつくってもらったりしたの。

―その工場はどこにあったんですか？

敏幸 どこにあったかわがんねな。県で集めていくの。

―集めていったのが背広の生地になって返ってくるんですか？

敏幸 注文するんだよね。背広の生地つくってけろ、とか。

五十子 ウサギ飼ってたこともあんの。あと、山羊ヤギも飼っていた人いたね。乳を飲んでた。

桜が咲いたら種蒔き

―田植えはいつごろやりましたか？

敏幸 田植えは遅かったね。もとは6月の初めごろ。いまは田植えは5月になった。前につくってたのは「藤坂五号」という青森で開発された寒さに強い米。いまのようにハウスはねえから、水苗代と称して苗代にばらばら蒔いたのさ。朝のうちに種蒔きすんだけど、その蒔く時期は、種蒔き桜といってみんなめやすにする古木があんの。隣の家の桜だ。いまもあって、5月になると咲くよ。



高橋さんはじめ、近所の人たちが種蒔き時期のめやすにしていた隣の家の桜。
2006年5月6日にうかがったとき、ちょうど満開だった。翌年、桜は枯れてしまったという。



家の前の小さな田んぼ。稲刈り直前の田んぼには、乾燥のための杭が立てられていた。
このころからクマが家の回りに現れるようになっていた。2006年9月26日。

— 田植えのときは手伝い頼むんですか？

敏幸 田植えは「結^よっこ」でやったんだ。隣近所の助け合いだね。いまのように機械などねえから「結、貸すがらや」といって手伝いに行く。そして、田植えすつときは貸してもらうんだ。田の草取りも、「おらいで田の草取りやつから来てけねが。結なしすつから」と頼みに行く。田植えのような忙しいときは、そのほかに川渡だの花山から10人ぐらい手伝いの人が来たもんだ。そんなときは、料理出したもんで、カド（ニンシ）は「田植魚」ともいったの。盛んに売りにきたから箱で買って干しておいたんだ。「結っこすべ」といまでもやってるね。

木枯らしの前に稲刈り

— 稲刈りはいつごろでしたか？

敏幸 稲刈りは秋の彼岸から10月に入るころくらいか。いつまでも置くとすがれ（枯れ）っちゃう。水分がなくなってしまうって、あんまり遅いと。だからすがれないうちに刈んの。稲刈りは微妙なところあつから。

—いまでも、はせ掛けするんですか？

敏幸 はせ掛けでなく、棒を立てて重ねていく杭掛け。なぜやるかというと、コンバイン使う人もいつけど、やるのは家畜がいる人だね。藁が必要だから。藁を食わせんだね。それと堆肥だね。

—稲刈りは何日くらいで？

敏幸 終わるまで1週間だな、約2町歩だね。このあたりは2町歩あんのは2、3軒くらい。互いに手伝ったりはいまはないね、子どもたちが手伝ったり、あと大型機械を入れたりだね。

—稲刈りのあと、温泉に行ったりしないんですか？ 湯治とか。

敏幸 行かないね。いまは年寄りはデイサービスだお(笑)。

—昔はお米の脱穀はいつごろだったですか？ 杭にかけておく日数は？

敏幸 触ってみて、水分が抜けたなと感じるまで。10日も掛けておくかな。そしたら脱穀だ。木枯らしが吹きはじめたら駄目だ、高い山さ雪が降ったりしても。最も遅い人だと正月の声を聞くころに、がらんがらんと脱穀機を回す家が2、3軒あったもんだ。杭掛けしてて、雪が降ったことあったけな。脱穀も時間がかかるもんだよ。

大水害で田んぼが流される

—家の前にある田んぼは昔からあったんですか？

敏幸 田んぼは水害でみな流されちゃった。あんどき俺家にいたから、戦争から帰って来てすぐ昭和20年か。ひどい台風で雷が鳴って、家の前の川があふれて、後ろの沢からも水来て。向こうの山岸からこっちの山岸まで、海みてえになったんだ。想像もつかねえよ。茅屋根の家の中也水浸し、床上浸水。馬小屋は馬の腹くらいまで水がだぶだぶ来た。馬は全然動かなくて水浸しになってたんだ。地面が見えてるとこ一つもなかった。小さい兄弟はそっちの方がなんぼかいいかと隣の家に避難させたんだけど、上の山に逃げて行った。ものすごいものだった。

—どうしてそんなひどい水害が？ 山に木がなくなったからですか？

敏幸 んだね、戦争で木がみな伐られたからね。

—それが敏幸さんがここで生活してきていちばん大きい災害ですか？ 地震もありましたね。

敏幸 前の川から水上って、仙北沢もあふれて。ダムできてからは、洪水なんねおな。地震はしょっちゅうあったもんだから、わけわかんね(笑)

【大森平の開拓】 杉の大木を倒す

—水害のあと、開拓が始まったんですね。高橋さんの2町歩の田んぼはそこに？

敏幸 ここから少し上がった開拓地の大森平にあんの。ここには7反歩くらいしかねえの。大森平はもともとは国有林で天然杉のあとに植えた杉林があったんだ。明治時代からものすごい杉林でね、秋田の不在地主が持ってたんだお。戦後、農地解放になって、それを開いたんだ。不在地主の土地があるというときみな解放されたから。杉の幹の太さは5尺や6尺はざら。根っこはこの部屋いっぱいになるぐれえ。ブルなんてねえから、ある人が乗ってたっていう戦車を

改造してブルドーザーにしたんだ。県の方で斡旋してくれて、そいつで木の根っこ掘り起こしたの。伐採した木は業者が買って行って、根っこは大河原の方から買いに来て運んだった。周りが腐ってても残った芯の部分を。装飾品になるんだと。そのあとを開墾したんだ。

—開いたのは近くの方たちですか？

敏幸 寒湯と軍沢部落。みなで12軒。入ったばかりは、おら家は両親と兄弟たちだけだったね。

—大変な苦勞されたんですね。

敏幸 開拓始まる前の藪の切り払いが、それは大変だった。鎌で笹一本一本切って。この部屋くらいやるってたって、藪が厚いから、とても進まねえの。最初は焼き畑開拓。焼き畑農法。倒したのを乾燥させて火つけて、そのあと蕎麦まくんだ、焼き畑には蕎麦が一番だね。その蕎麦を食いながら開拓やったわけだ。またその蕎麦がうまくなくて。何植えても駄目で。あとは豆植えたりね。

—このあたりは火山灰土ですよ。



手掘りで掘り進めた隧道。沢側から山側の開口部を見通す。
固い岩盤であるのが見てとれる。ノミの跡がくっきりと残っていた。



隧道の入口には手で開け閉めする樋門が設けられている。
田植え前に開けて、水を流し清掃する。右側が高橋一幸さん。

12戸の農家が強い結束で推し進めた 大森平の開拓

大森山のふもと、標高500mのところに大森平があります。戦後、鬼首を襲った大災害を経て、開墾が始まったのは食料増産の掛け声高い昭和21年(1946)のことでした。広さは68ヘクタール。長年放置された土地には杉の巨木が生い茂り、雑木や笹が繁茂し、開墾は困難を極めました。冷害による収穫皆無の2年を経て、31年には水田を開くことを決意。用水は北東部を流れる仙北沢からトンネル工事で取水する計画になりましたが、工事を請け負った会社はあまりに固い岩盤のため次々に撤退。入植した4人の農家が自らノミを持ち、両側から手掘りで掘り進め貫通させたのは33年のことでした。喜びもつかの間、46年には国の減反政策が始まります。水田事業のための莫大な借入れをすべて返済したのは平成3年(1991)のことでした。

▶大森平の開拓の歩み

昭和21年(1946) 洪水の被害を受けた7名の農家が開墾を始める。「大森平帰農組合」結成。

昭和22年(1947) さらに5名が加わり、12名に。

昭和23年(1948) 5戸の住宅が建つ。

昭和24年(1949) 12戸の農家が宮城県の入植者適格証の交付を受け、一戸あたり約6町歩を保有する自作農となる。7戸の住宅が建つ。

昭和28年(1953) 冷害で収穫皆無。翌29年も。

昭和31年(1956) 米作を決意。開田が認められ整備開始。仙北沢からの隧道工事が困難を極める。金沢長蔵、中鉢運之丞、安達広志、大場新喜の4名が手掘りで掘り進める。

昭和33年(1958) 隧道が開通。初めての田植えを行う。

平成3年(1991) 開田資金借入れをすべて返済。



高橋敏幸さんの手元大切に保管されてきた「大森平の開拓」。「開拓者の記録 新しい村誕生の記録」。「開拓者の記録」は扉額に仕立てられ、集会所の壁に掛けられている。



大森平、夏の風景。2016年7月。

敏幸 酸性土。火山灰土だから、植えてもなんだかん芽が出ねのがあんの。色が真っ黒で軽い。水かけてもさーっと通してしまう、粘らない土だお。水田にするには粘り気のある土のほうがいいんだね。

―特につらかったことは？

敏幸 最初のうち、食べる物がなかったこと。昭和28年、29年はものすごい冷害だった。収穫皆無。寒かったんだ。国が助成金を出した。夏が寒いと冷害だね。いくら花が咲いても実を結ばねえから。行ってみっとわかつけど、飲料水も裏の山すそから少しだけ。杉の皮はいで、それを槌にして飲んだんだ。たらたらと出てくる水を。少しばかりの苦労ではねえの。みんな苦労した、ここでは。でも途中でやめた人はいなかった。

水を引き田んぼを開いた

―焼畑をやつて、そのあと田んぼにしたんですか？ 米には向かない土壌でも。

敏幸 土地の標高が高くて水が引くのに大変だし、最初は畑にしようとしてたんだ。米はあと

からだ。時代がそうなってきたんだ。米つくるにもトンネル掘らねえと。水がねえから。仙北沢から千メートルのトンネル掘ったの。何年もかかったんだ。

―水は、そこしか引けるところはなかったんですね。

敏幸 沢はそこで断崖になるから、そこからしか引けなかったんだ。何年かかったんだったか。とうとうあきらめかけたとき、手前から掘つて、奥からも掘つていて、「音が聞こえたぞ」って。坑道がうねってたんだ。

―誰が掘ったんですか？

敏幸 4人くらいかな。俺はやってねえの。この近所に金山があつて、そこで鉱夫やってた人がいたんだ。鉱山から出た鉱石はカマスさ入れて、牛とか馬車で運んで秋田の小坂鉱山で精練した。終戦なるまでやったね。銅も混ざってた。岩入の鉱山も金出たね。花山の温湯に運んだね。あちこち採れたんだね、金が。

―田んぼを開いていったんですね。

敏幸 そうだね。でも田んぼは満足なもんでないから、猫の額ぐらいで。そのうちにいまのブルドーザーっていうのが出てきて、それで水田にしたのさ。いい機械が出てきたから、それで田んぼをつくって。水かけて、7月になっても田植えしたな。トンネルくぐってくると、水は1度か2度低くなるんだ。だから水を溜めてね、7反歩の溜池作っただ。水温2度くらいは上がる。田植えのころ、水温が低いのは駄目だ。

—溜池をつくったのは？

敏幸 県の指導だね。せっかくやったんだから、こうしてああして、と。国の助成があったからできた。個人ではできない。ようやく食ってるようでは、できるわけがねえの。溜池の管理も県がやったんだけど、いまは私たちの管理だね。

事業を進めるための助成仰ぐのに借金するまでが大変だったの。書類つくるのから何から。俺、専務理事だったから。頭、馬鹿になるようだった。月に10日は仙台に泊まってた。愛子の方さ行く、八幡町あたりのT字路のところにあった開拓会館に安く泊めてもらって。交渉と借り入れ事務から何からやって。宮城県中の開拓組合の書記やってる人たちが、しょっちゅう書類づくりやってた。その借金返したの、つい最近だ。



大森平の水田の生命線、仙北沢。毎年田植えの前の時期、集落の人は溪谷に下りて、雪で崩れ落ちた沢筋の岩や石、泥の撤去作業を行う



作業のあとの昼食。テーブルには弁当のほか、女性たちが手づくりした漬物や山菜料理が所狭しと並ぶ。大森平の集会所で。2016年。

—最初に植えたお米の銘柄は何でしたか？

敏幸 青森県の「藤坂五号」だったか。ごく早稲のやつだ。やはり、早くとらないと雪になっちまうから。いまは「こころまち」とか「あきたこまち」とか。「あきたこまち」はうまくない、寒さに合わない。うまくいくと「反当たり5俵か6俵ぐらいか」。

—住宅も建てたんですね、上にも家があったんですね？

敏幸 当時はね。上に家があったよ。いまは、下に戻って暮らしてて、上の家は古いから作業小屋になってるけども。

—大森平を抜ける国道108号線はあとからですか？

敏幸 あとから、最近だお。国道が通って、この辺の人たち、みな田んぼ買収になったの。家も動かしたんだ。下に丸太入れ、引っ張って動かした。道路の便がよくなってよかったの。俺は免許とつたのは昭和40年ころかね。もとはバイクね。

—いまは上に何軒くらい住んでるんですか？

敏幸 さまざまだね。下に、もとのとにきてるのは4人だけかな。あと、上に家があるけど他町村に暮らしてる人も2人いる。

—いまも沢水は生きてるんですね。

敏幸 そうだね。この近くでイワナの養殖やってんだ。この水使って。冷たい。14度くらいしかない。土地も貸してるんだ。

—減反はどうなんですか？　ようやく米つくれるようになったところに減反が始まったんですね。

敏幸 いまは、3分の1は減反だね。牧草まいたり、さまざまやってるけどもね。田んぼ、売ってしまった人もいんの。住んでるだけ。買ったのは鬼首の人で、米はつくってっけども。人さ管理まかせてる人もいる。子どもたちも親元離れてるし。全然作ってないのが4人ばりいるね。

―大変な苦労続きの開拓でしたね。

敏幸 苦労したって、大森平だけだから鬼首で開拓して成功したの。鬼首スキー場のそばの開拓はなくなったし、八森はちもりの入植者もいたけどいなくなった。石巻だ、どこだって、入植者はあちこちからだいぶ来たけど。みんな開拓始まったのは戦後、同じころ。ここがうまくいったのは、水引けたからだ。

雑穀を蒔く

―鬼首は米以外に何をつくっていましたか？

敏幸 いまは大根だけど。雑穀や蕎麦は少しやっていた。開拓の時は少しね。そうだね、ゴマもつくったね。大豆は自家用の味噌づくりぐらいか。麦は駄目だ。寒さの関係かな。麦は早く蒔かないと駄目だし、春は麦踏みしないと。でも雪があつて踏みねえから。

5 山からいただく恵み

あたりはブナの森

―このあたりの山、昔はブナもいっぱいあったんですね？

敏幸 ああ、ほとんどブナ。昔はブナの木はいろんな材料になったんだ。

―何に使われたんですか？

敏幸 軍用材。昔はこの辺の若い人たちはみんな徴用になって、伐採から搬出やったもんだ。伐ったブナの大木は、鬼首の奥の方の営林署の貯水場に運んだんだ。あれは国でやったんだな。太くて長い木を水につけて製材所をやったもんだね。それが飛行機になるとか、何になると

か……。軍艦の材料なんかに、使ったんでねえかなあ。果たして飛行機に使ったもんかはわかんね。

山の雪が消えたら山菜採り

—山菜採りには行きますか？

敏幸 ああ。山菜はコゴミから始まって、アイコ、ウド、そしてゼンマイ。昔は山の雪が消えたころ、5月になるとゼンマイ採り。馬市とゼンマイ採りは同じころだったな。これはすごく金になったんだお。ゼンマイは奥山に入らないと採れねの。2時間くらいかけて山に入ったもんだ。山に泊まって採る人もいたな。朝ごはん食べて、7時ころに出発、山に9時ころに着く。風呂敷におにぎり大きいのを2つぐれ、味噌つけて焼いたのを持って行った。

こっちからもほっちからも採りに行ってるから、「ほーっ」と呼ぶと、「ほーっ」と返ってきたもんだ。沢筋を歩いて行くと、木も何もないようなところに出てんだ。休み休み昼過ぎまで採って、家に戻るのは3時から3時半ごろ。

そのあと、女から子どもから家内中でゼンマイの綿^{わた}を取らないとわかんね。それを鍋釜でどんどん煮て、次の日、筵^{むしろ}の上に広げて、女の人たちは揉み方さ。揉まないと固くて食われねんだ。

揉むのは、つるつるしたところでは駄目。筵の上で力入れねえと、固くなっちゃう。

五十子 最初のうちはあんまり力入れては駄目なの。乾いてきたら力入れる。暇ねえの。ごはん食う暇もなかった。一番乾くときだからね。

敏幸 太いゼンマイ採って南京袋に入れて、12、13貫目ぐれえぎつちり詰めて、背負ってくるわけ。それを干して揉んで乾燥させると、1貫目くらいになる。減んの、減んの。

ゼンマイは、買いつける人が回って来たんだお。地元の人もいたし、よそから来る人もいたな。乾燥具合とか太さ見て値段が決まったんだ。その先のことはわかんねな。旅館なんかに卸したんでないかな。終戦のあと採って売るようになって、盛んになったのは30歳ぐらいになってからか。金になったのはゼンマイだね、ワラビよりも。そのころは、ミズダのコゴミはあんまり採らなかった。

いまは採りさ行っちゃって、ゼンマイ出てないおな。結局、根こそぎ採り尽くしてしまったんだ。一株に5、6本出てるから1、2本残せばよかったんだな。いま、出てねえよわ。ゼンマイ採りする人も、いねえよわ。

—草原を野火入れしたあと、いいワラビが出るって聞きましたよね。

五十子 すごくいいワラビ出てね。

一幸 鬼首には鬼首小学校のほかに、北滝、岩入、尾々沢、蟹沢と4つ分校あったんだが、子どもたちは2日ぐらいかけてワラビ採りすんの。それを業者に売って、教材にしたりスポーツのための費用にしたりしたんだな。

五十子 子どもたちが「採らせてください」ってきてね。

敏幸 5年生、6年生が山のように背負うくらい出たんだお。

五十子 えらく出たの。

—そこ（庭先）もコゴミいっぱいなってますね。

五十子 あれはみなバンザイして（開いて）しまつて（笑）。これ（テーブルの上の料理）は、タラの芽、和えものしたの、ちよつと塩っぱいかも。田舎料理でがす。タラの芽は天ぷらもいいいけどね。

—いちばん早く出てくるのコゴミですか？

五十子 でもなんだか氣候がおかしくて、あつという間にバンザイしてしまつた。もうほとんど終わったようなものだね。シドケも採れるけど匂いがするから、臭いの苦手な人はね。どうぞ、

もつと食べてください。ゼンマイは綿とつて大変だったけど、根曲がり竹もえらく手間かかんの。皮むいて煮て。いまは息子にも「あんまり採ってこなくていい」っていつてんの。

倒木からキノコが出てくる

—秋はキノコ採りですか？

敏幸 今は山の木を伐ってしまったけど、昔は木が多かったからキノコが自然となったもんだ。木が太くなると中が腐って、それがキノコの菌になるんだな。木が老化すると、育ちやすくなんだね。冬の間に倒れた木からキノコが出んの。夏倒れた木は駄目だね。水分が多いから、木の皮がみなはがれちまう。冬の木の皮は乾いてぴたっと張り付いてっから。そういう木からキノコが出てくんた。

—何が一番採れたんですか？

敏幸 マイタケなんか、すぐく採れたもんだお。ナラとかブナの根っこに出てくんた。1本の木で40キロのマイタケ採ったことあんの。そのころは、八百屋から注文あつて、専門に採っ

て歩いてたんだ。そんなときは、4キロくらいの株が5つか6つ、小さいのが40株くらいあった。かたまりで、根本に。紅葉のちよつと前くらいの時期だね。

—お金になったんですか？

敏幸 マイタケは崩してしまうと駄目だから籠^{かご}に入れて背負って来んの、つぶれねように。重ねてはつぶれっから、2回に分けて下ろしたんだ、残りは隠しておいて(笑)。10万円くらいだったかな、天然マイタケだから。業者は驚いたおな、あれが最高だった。

—今はそういうナラの木はないんですか？

敏幸 伐ってしまったって、いまはないのわ。初雪の頃になると、ムキタケ、ヒラタケがとれる。倒木の幹からたくさん出たもんだお。ムキタケは一斗樽にきっちり詰めて醤油に漬けておくの。樽の上にササの葉載せて、上に石載せて。「何樽とった」って自慢しあったもんだお。一番採れたときで、10樽くらいだな。店やってる人たちが買ってくれんだ。キノコがよく採れたのは、俺が30代、40代のころだね。「キノコ、採って来てくれ」という人はいまでもいるよ。

—ナメコも採りましたか？

敏幸 ナメコは、そうは採れないもんだ。ナメコは真っ赤に見えっから。遠くからもよく見えるの。小粒のと開いたので値段が違う。小粒のが高いね。

—キノコ採りは紅葉のころから始まるんですか？

敏幸 落葉終わってから、雪が積もるまでだね。マイタケから始まって、ムキタケ、ナメコが最後だね。他には、ブナカノカとか。ブナの大木の枯れた腐れかけたのに出んだ。真っ白になるくれえ。ブナカノカは幹に、高いところにもずつとなんの。

—採る道具は？

敏幸 細い木を切って、それでつついて落ちたのを拾う。キノコ採りは、みんなが行くわけでねえし、経験積んだ人は山を見てればわかるもんだ。乾燥しては駄目だね、マイタケは乾燥したとこだけど、ムキタケやナメコなんかは湿ったところ。

鉄砲がついで猟に出る

—敏幸さんは、お父さんもマタギだったんですか？

敏幸 んだの。

—鉄砲ぶちの家というのは、代々鉄砲ぶちなんですか？

敏幸 小学生のころ「ウサギばいさ、あべ」と連れて行かれんだね。祖父さんも親父も猟をやっていて、ウサギ狩りでは子どもはウサギを追う勢子^{せこ}をやるんだ。危険なところは連れて行かれなけれどね。「やんだ」っていつてても、結局、好きになっちゃう（笑）。

—くつついて歩いて覚えるんですね？ 最初にしとめたの、覚えてますか？

敏幸 もうわがんねえな。獲ったのは、ウサギ、ヤマドリ、バンドリ（ムササビ）。夜になっと出てくつから「晩鳥」。獣のくせに飛んであるくんだ。テンもいたし、なんでもいっぺえいたんだ。

—猟はいつなんですか？

敏幸 寒くなってから、11月から3月ごろまで。いまは2月12、13日頃までで終わりだけっともなぜかっていうと、寒い季節には肉は脂かかってうまいんだ。暖けえときは、匂いしてすぐ腐ってしまう。獣自体が匂いすんだ。

—遠くの山に行くんですか？

敏幸 この辺の山だね。夕方、ごはん食べてから一人で出かけた。自分の庭のようなもんだから。猟師の感で、この天候ならどこにいるのかわかるもんだ。無駄な所には行かねようにしてた。

お月様が出て空に薄い雲がかかっているときが一番いい。ムササビは月夜の晩に出てくんだけど、あまり煌々と照ってては駄目なんだね。夜に出てきて木の芽を食べんだ。大きいブナの木なんかのてっぺんにいて、「キリキリン」と鳴くから、ああ、あっちの方だとわかる。お月様が薄ぼんやりとかかかってと、木の間に止まってる姿が真っ黒に見える。月が明るいとかえって見えねの。そこを鉄砲で撃つ。しとめて朝方に家に帰ってくんだ。

—朝まで歩くんですね。

敏幸 月のいい晩待ってて、条件良ければ夜明けまでだ。月夜だから、明かりは持たなくたってよく見えんだ。遠くまで行くときはおにぎりなんか持ってくけども、近くは持っていかな。雪が降ったって遭難なんかしねよ。寝るのは帰ってきてから、朝方だね。

―犬は連れて行くんですか？

敏幸 ああ、犬も連れて行った。犬もちゃんと覚えては、「待て」といえば待つし、「行け」といえば行くしね。自然と犬も覚えてくの。小さいうちから育てるから覚えんだ。猟犬っていうわけじゃなくて、雑種。仲間いっとね、「おら家にいい仔犬いだぞ」なんて。「んで、俺さけろっちゃ」って。

―犬も猟を楽しみにして待ってるんでしょうね。

敏幸 ああ、待ってるなんてもんでね(笑)。ちゃんと支度を見て、今日は山さ行くんだとわかるの。

―覚えてる犬いますか。猟が一番うまかった犬は？

敏幸 ポチ(笑)。一番呼びやすいな。

―獲物が捕れるときは何匹ぐらい？

敏幸 5匹6匹が限度だね、重てえから。全然捕れないときもあんの。

ウサギの巻狩り

―ウサギ狩りは大勢でやるんですか？

敏幸 ウサギは、昼間、雪が降ったあとに巻狩りをすんの。「おまえはあっちさ立て」「あんだはそっちさ立て」といって待ってるわけだ。追ったりする勢子の人たちが騒いで、「いたぞー」と。ウサギがバラバラ出てきて立って見てる。そこを撃ちとるわけだ。

ウサギは皮は売って、肉は食料にしたの。うまいんだよ。うまいねえ(笑)。ウサギはウサギ汁。やっぱり大根と煮たり。骨を細くなるまで鉦ナタでつぶして、骨髓混ぜてウサギ玉と称してピンポン玉くらいの団子にして煮て食ったもんだ。あと煮付けて瓶にしまっておいたり。栄養の源だ。量が多いときは。2日3日なら、ぶら下げて置くこともあった。

—さばくのは自分でやるんですか？

敏幸 全部自分でやんの。それも親父やるの見て覚えたんだ。皮はぐったって、傷つけてだめだし、はぐ箇所があつからね。ウサギとか仕留めたら、雪の上とか板の上で、お腹側からナイフで切って手ではがして、はがしたやつを板の上に釘打ちして張り付けんの。四角くなんだ。生のうちだから、釘打ちながら伸ばして押さえていくんだね。

—生なのに、腐ったりはしないんですか？

敏幸 すぐ乾いてしまう。ぱかぱかと。

五十子 そしてそのまま売んのわ。それを業者がなめすの。

敏幸 ウサギ、ムササビ、テンだの、毛皮はよく売れたの。ウサギは山にின்のは白いの。保護色だからね。雪が降るとこだから白い。首巻きにいいんだ。毛皮は商売人がいて、まわって来んの。商売人は質を見るわけだ。大きさから毛並みから何から。そして1枚なんぼって買っていくわけだ。1枚いくらだったかな。忘れたなわ。鬼首の人もいたし、山形だの他町村から来る人もいた。高く買ってくれる人に売ってやんの。肉を買いに来る人もいたな。毛皮は毛皮、肉は肉。

クマを仕留める

—クマを獲ることもあったんですか？

敏幸 クマはめったに獲れねえから。いまのようにこのこ出てこねえから(笑)。クマ獲りには栗駒山のとっぺんまで歩いたな。歩く距離はすごい。鬼首峠まで上がって黒滝、ずっとまわって帰ってくる。何人かいつしよのときもあったし1人のときもあった。いろいろだね。

—山の中でクマに遭遇するようなことは？

敏幸 下ばかり見て歩いていて、目の前にクマが出て、「わーっ」ってびっくりして。そしたらクマの方が逃げて行ったことあったな。猟犬が騒ぐからわかるね、ワンワン鳴くから。犬が騒ぐから木に登ってみたら、沢にクマがいてすつとんで逃げたこともあった。子グマは2年たつと親と離れんのね。母グマは、藪の中のイチゴが熟れる頃に子グマを連れていって、食べるのに夢中になっている時に離れるね、その頃にはまた母グマが発情すんだ。

—動物を殺生するのは、かわいそうな気もしてしまいますが。

敏幸 それはいまだからいえることだ。それをしなくては、生きていけねえのだから。その時代、その時で変わっていくもんだ。

― 猟をするのに資格は必要だったんですか？

敏幸 鑑札はね。

五十子 それでお金、毎年何万か払って。2万か3万か。高かったっちゃね。それ払わないと、鉄砲ぶたれない。

― 鉄砲はどこで買ったんですか？

敏幸 専門に売ってるところあったの。古川方面に。火薬から何から。

― 何歳ごろまで猟をしたんですか？

敏幸 昭和55年ごろやめたかな。獲物とっても売れなくなって。やる人も少なくなって、いまはまわりに5、6人だけだね。いまは日没と同時に鉄砲は撃たれなくなったし、レジャーだから。



敏幸さんが仕留めたクマの頭蓋骨。ハンター仲間で猟をしたときは、集まってクマ鍋を味わうこともあったようだ。どぶろくが回され、自慢話も繰り出したのかもしれない。



自然の恵みは家の回りにも。高橋さんの屋敷裏には掘が通り、5月にはクレソンが生い茂った。収穫する一幸さん。2019年5月。

鉄砲持つのもきびしくなったし。

—山で危ない目に合うことはなかったんですか？

敏幸 あんの。黒滝の上でクマの姿見たのさ。明日狙うかと思って、生木焚いて寝てたつけ、火の粉が飛んでまわりが焼けてたんだ。飛び起きて、あわてて火踏み消したことあったな。怖いのは雪が降ってホワイトアウトになっこと。方向感覚がなくなっちまう。行方不明になった人もいんの。鉄砲ぶちする人の間では、若い人たちは歳のいった人たちから危険なことは教わってんの。「表層雪崩が怖えから、傾斜のあるところは横切っては駄目で木のそばをたよりに歩け」。「芝のあるところは前に行くな、ずっと手前を歩け」。斜面を横切って雪崩で死んだ者もいたからね。

—山の神様を祀っていると聞いたことがありました。

敏幸 沢だの山さ入って行くとこだの、危険なところには山の神様を祀ってあんの。大きな木の根元、大きな石の前にも。山に入るときは、木の枝なり何だりを折って挿して手合わせんの。「山の神さん、怪我のないよう頼みます」と心の中でつぶやいてね。山の仕事をする人なら、みな

信仰してたお。

子どものころの山遊び

—小さかったころ、山の中歩いておやつ代わりに食べた物、何かありますか？

五十子 クワゴ。口、真っ黒くして。あと山イチゴなんか、あったっちゃな。

敏幸 そんなにイチゴなんかねっちゃや（笑）。アケビは食ったな。川原さ行くと、いっぺいあった。種のとこ食べて、種は出して。いまは食べねけど、クワゴはよく食べた。野生のクワ。山ブドウも。

五十子 コグワだの、マタタビだの食べたな。コグワはおいしいけども、マタタビはうまくねえの。敏幸 魚捕りはしたな。魚はちよっとしたとこに、ごちゃごちゃなんぼもいたから。この下の川、大きな川から上って来っからさ。イワナとか、ヤマメはいねけど、ドジョウとかハヤはいた。網でとったんだね。小さいときは水に潜っていつて手づかみで獲ったこともあった。冬は、川の水の溜まっているところに魚がいっぱいっから、そこに雪をぶっこんでやって、みんなで踏みしめておいたもんだよ。魚を仮死状態にするわけだ。穴あけっと、そこからびよんと川魚が出てくる。若いときはゼンマイ採りの帰りに、イワナ5匹ぐれを釣ったこともあったな。

最近は、首都圏から釣りにくる人が毎日のようにいんの。春先はイワナも腹すかしてっから、いちばん釣れんの。地元には漁業組合組織があんだけど、俺は入っていねえの。

変わる山

―昔と今で山はずいぶんと変わりましたか？

敏幸 キノコは駄目になったね。クマもそこらに出るようになったおな。今年は特別だ。その辺をクマが歩いてんだから。おら家でなど、稲食われたんだお。稲みな倒されて寝てんだ。稲食うなんて、こんなの初めてだ。昨日も、寒湯でコンバイン頼んで稲刈ってしまったって。そっちでもこっちでも、山のそばの田んぼが食われてっから。ひどいもんだね、家のそばでは、バタンキョ（スモモ）食われたね。木に登って枝になってんの食うの、薄暗いころ、明け方かな。昔はそういうのなかったね。山でクマに遭ったことはあんの、何回も。でも、音出していればクマは逃げてっから。山でクマに襲われたなんてことはなかった。昔は、クマの食い物が、ブナの実、木の実が多かったから出てこなかったんだなあ。ところが、いまは木伐られてしまっって、木の実がなるまで育つのに何十年もかかって。芝山だから出て来んだね。

―山は季節季節、豊かですね。

敏幸 ああ、山には何でもあんの。ここは冷害が多いから田んぼ中心では暮らしていがんね。いろんなもの組み合わせで地の利を生かして暮らしてきたんだ、自然相手に。そろそろ暖かくなっって来たな。春は忙しいもんだ。

6 ものづくりあれこれ

冬はお膳づくり

—お膳づくりはいつからやっていたんですか？

敏幸 祖父さまの代からで親父もやってたから、見様見真似で覚えただね。囲炉裏端でつくってから。家の人に「鉋かけろ、何しろ」っていいつけられるもんだから。俺は学校教員やめてからつくるようになったんだ。冬場の仕事で正月の前は注文が多くなって、寝る暇がないくらい忙しかったおな。必ず新しいお膳を神様に供えるものだったから。新しいものを買ったんだ。五十子 でき上がったのは30枚を重ねて茅編んだ入れ物に入れてひとまとめにして、それを2つ背負わされんのさ。田野まで。力仕事したことなかったけど、若えから背負って歩いたの。塗師のところに持つてくの。えらい重くて、大変だったよ。

敏幸 何回も手かけて。俺たち山から木伐ってきて、お膳つくって、塗り師が漆塗って、それを卸して、それを店屋で小売するわけさ。

五十子 旅館もそれを買うんでないの？背負っていくの、冬だから大変でさ。そんなときは、つまご草鞋っていうのはかせらつてねえ。いまは笑い話だけど。

—炭焼きはやらなかったんですか？

敏幸 おら家は炭焼きはやらないで、お膳と曲げ輪っぱをつくってたの。炭焼きやる人は炭焼きだけ。お膳はまた別に専業、お椀づくりもまた別。漆を塗る人はまた別。でき上がったものを塗師が買ってくれるので、それで現金収入を得たんだお。塗る人も鬼首にいたの。おら家に泊まって漆掻きする人もいたね。お膳はそんなにつくる人はいねがったんだけど、木地組合を組織して営林署から木の払い下げをもらったんだ。材料は山に豊富にあって、ほとんどはホウノキ、カツラ。柔らかいから鉋かけんのが楽で、細工がしやすいの。

炭焼きの人たちは、材料出しのために毎日山にソリ引いて行ってたな。炭焼きの窯ぶつのは雪の前なんだ。一年中焼いてる人もいたな。

—お膳の大きさは大体決まってるんですか？

敏幸 1尺3寸。40センチくらいだ。高さはさまざまだったな。お膳は角のところの組み立てが難しいの。内側に細かく切れ目を入れると、スーッと曲がる。細かい目の小さなノコギリで、内側を薄く残しながら切れ目を入れる。しかも、この切れ目は並行に入っているんじゃないの。下手な人がやると、バチツと折れちまう。お膳づくりを盛んにやったのは終戦後から戦後、昭和30年ごろまでか。秋田の川連の講習会に泊まりがけて修業しに行ったこともあったんだ。道具は錆びてるが、まだある。

—つくったお膳はもうないんですか？

五十子 何枚が残ってたけどねえ。

敏幸 昔は農家は40、50のお膳は持つてるもんだった。二の膳もあったし、お椀もあった。ご祝儀だの法事は自宅でやるもんだったから。お膳箱があつて、そこに入れておくもんだった。昭和40年ころまでは。いまも持っている人はいるが、壊れたりしてそのまましんなねな。

お膳づくりは忙しい時期は夜10時ころまでやってたもんだお。まだ電気ねえころでガスランプとかカンテラつけて。風呂に入って休むと一杯飲みたくなるおな。それがいいんだお。疲れがいつぺんにとれる。毎日どぶろく飲んだもんだね。

五十子 どぶろくは寒造りにすつと、翌年の夏までもつのね。

敏幸 見つかったら罰金とられっけど。たいていの家で、つくってたな。酒の勢いで働いてたんでねえが(笑)。

天然杉で曲げ輪っばづくり

—お膳だけじゃなくて、曲げ輪っばもつくってたんですね。

敏幸 祖父さまと親父と2人で。つくったのは、丸と楕円の2種類。輪っばを7つぐれ入れ子になるようにつくったもんだお。外側の輪っばが2尺で、そこに7つ輪っばが納まったんだ。材料は自生山の杉。岩の上に生えてんだ。いまは天然記念物になってるから使えねえよ。年輪の目がつんで、1寸くらいの幅に30、40くらい入ってる。虫眼鏡で見ないと見えねくれえ。払い下げを受けつと、太いのにクサビを入れて縦に割んの。半分、また半分と割っていくと紙のように薄くなんだ。見事に割れるもんだ。紙のようになった杉板に鉋かけてくんだ。それをお湯に入れておいて、熱いうちにしながら紐で結つけていくの。

五十子 割り箸の大きなようなのでビチつとはさんで、干しておくもんだったねえ。

敏幸 祖母さまなんかは、山から採ってきた桜皮で曲げ輪っばの縫い方した。鬼首には山桜もいっぱいあったからな。

―採ってきた桜皮を縫えるような繊維にするのは女の人の仕事ですか？

五十子 んだのね。

敏幸 ちょっと間違つて脇さ穴あけてしまうと、曲げ輪っぱの下に桜皮が出ねぐなってしまう。杉板が裂けてしまったら駄目だし。膠にかわで貼り付けていくんだ。膠は牛の爪なんだ。そいづでねばしたんだ。

五十子 誰か買いさ来てたんだべか、その輪っぱ。

敏幸 来ったんだ。

―縫い方覚えてますか？

敏幸 縫い方はわかる。穴こ開ける道具がねえもの。型がないとわがんね。一つつくるのにも、さまざまな道具がないと。簡単にいがね。親父なんかは、刃物が切れなくなると自分で鍛冶屋やって、ふいごだなんだって出して。トンテンカン、自分でやって刃つけてたもんだ。

刃物でよく切れんのは、福島だな。山形からも売りにきた。鍬は秋田の五城目ごじょうめのが最高だった。

―お父さんはずいぶんと器用だったんですね。

五十子 日当たりのいいところに、子ども部屋つくったりもしたね。衝突つしょうてなんかもつくったんでねえの。

敏幸 大工仕事したり、お膳つくったり、曲げ輪っぱつくったり。

―人に頼まれて、家建てに行ったりもしていたんですね？

敏幸 んだんだ。その筆筒も親父つくったの。

五十子 そのころは、いまと違って家も建てさえすればよかったから（笑）。いまの牛小屋のところに作業小屋があったんだおな。ほんとに昔の人たちは、骨折りの仕事ばりして、良く生きてたもんだった。

敏幸 何でもやらなけりゃあ、駄目だった。壊れたって、ぶん投げるわけにいかね。修理せねば。そのころは、そっちこっちの家でスキーつくる人もいたの。スキーの先を鋏きりばしではさんで丸くして熱湯さ入れて、乾燥させてつくったんだ。

五十子 うちも何だりかんんだりやって、金持ちになっかと思うと貧乏ばかりで（笑）。

敏幸 貧乏暇なしだ。

五十子 昔の人は「八細工七貧乏」といったもんだ。あんまり何さもかにさも手つけてやったって貧乏ってこと。「七転八起」の逆（笑）。

―貧乏が7つも来るってことですか？（笑）初めて聞きました。七福神じゃなくて、貧乏神が7人も来たら（笑）。

五十子 昔の人たち、うまいこというんだったてば（笑）。

藁でつくる履物

―藁仕事もあれこれやりましたか？

敏幸 昔は何でもつくったさ。草履も草鞋もつくったもんだよ。つくらねば、裸足で歩くほかね（笑）。

五十子 草履はいて歩くと、腰くらいまですっぱね上がって汚れてなあ。学校に行ったら、草履乾かしておくの。やろっ子だのいたずらして火の中にくべてしまつて、焼かった人は帰れなくなつてしまふんださ（笑）。

―草鞋は一足どのくらいもつんですか？

敏幸 履く人の仕事次第だな。大体一日で駄目になる。だから腰に代わりの草鞋を結つけて仕事しないと。切れてしまつて、藁っこだけになつてしまふ。

五十子 冬は、甲のところに覆いのあるツマゴ草鞋というのをはいたの。カンジキづくりもしたっちな。自分の家で使うものはつくれないと。ケラもつくるまねっこしたんでね？

敏幸 雨降ったときに背中につけるケラもつくったな。一つつくれば何年も持つものだった。大体、男の仕事だね。商売でやる人はいねがつた。

五十子 タワラ靴（膝丈で俵を立てたような大きい藁靴）で、雪踏んだもんだつたよ。中さ、縄こつけて踏んだの。今年は、一幸が雪中田植えを再現するからつて「タワラ靴つくつてけねが？」つていわれたんだけど。ほいなの、忘れたっちゃわ（笑）。

―長靴みたいな格好の藁靴も編みましたか？

敏幸 ジンベエはつくんながつたな。藁仕事は男の仕事だな。子どものものも、つくつてれば大きさわかつからわ。このへんで止めればいいな、と。

着物を仕立てる

—女は機織りとかやったんですか？

五十子 女は着物縫わなくてねえの。反物売りがしょっちゅうきたから、それ買ってね。昔は紺の着物が多かった。

敏幸 小学6年までは着物だった。高等科に入るようになってから洋服というものを着せられたんだな。

五十子 私が子育てしてたときは、子どもによくネル（フランネル）のものを縫って着せたの。縫い物、好きだったのね。傷めばつくろってね。昔は洗濯はあまりしねの。汚れればすっけど。たらいと洗濯板で風呂場でね。そのあとだね、洗濯機が出てくるのは。

繭、蚕もやってたね。嫁にくる前、家にいたときは、母親に反物なんか織るの教わったり、帯織ったりね、絹糸で。

—お蚕飼ってたんですね。

敏幸 座敷に蚕も飼っていたことあった、我々が小さいころだね。部屋に棚つくって。この辺

は山に行くとき桑の木があんの。蚕は桑の葉が生えてきてからだから、6月以降だね、6月、7月、8月。

五十子 こころへんでは繭は売らなかったから、みな自家用。蚕ぐつぐと煮たら、ウツギの木持ってきてカラカラカラとすと、そいづに繭がみな引つかかってくんの。いまうちの庭にあって白い花咲いてる木があるけど、あれ。蚕一つから糸一本出るからさ、そしたら糸車でぐるぐると回して糸にしたの。

—反物織るわけですよ。絹は糸が細くて大変じゃないですか？

五十子 糸が切れつとねえ、直し方するのが大変なの。

—絹糸とって、染めたんですか？ 山の木とか天然の染料だったんでしょうか。

五十子 何だったべ。染め粉あったんでなかったかなあ。けっこうきれいに染まって。空色とかあったような気がするから、やっぱり染料は買ったのですね？

—デザインっていうか、彩りは自分で考えて。

五十子 何も考えることねえから、糸でギリギリと縛って、絞りにして。そして染めて布団の表の側にしたり。真綿とかにはしないで、糸だけね。

―機織り上手なおばあちゃんとか、いたんでしょね。

敏幸 歌の文句にもあっぺっちゃ「糸車」っていうの。「うーうーうー」って。祖母さまの仕事だ。
五十子 家のばんつあんがやるもんだったから、こっちの家にきてからも近所の人に教わったりして織ってたけども、家ほごしたとき、織り機だのみな投げてしまったのわ。

出稼ぎに関東へ

―お膳づくり、曲げ輪っぱづくりはいつまで？

敏幸 食器から何から新しいものが出てきて売れなくなってきたのわ。

―そのあとですか、出稼ぎに出るようになったのは？

敏幸 ああ、行ったね。羽田、蒲田。40代から50代のころね。出稼ぎは金になったんだ。息子も名古屋の会社なんかに行ったね。

漬物づくりの仕事

―五十子さんは漬物が上手って聞きました。

五十子 いま、味噌漬けつくって販売してるのね。
敏幸 近くの人たちでやってる「やまが旬の市」は、5月末ごろから11月の初めまで土、日にやって、栽培した野菜だの漬物だの売ってんの。コゴミ、ウド、アイコ、シドケ、山菜も売んの。高原大根も、若い人たちがたくさんつくって売ってんだ。しょっちゅう秋田から買いに寄る人たちがいるようだよ。

五十子 だからけっこう仕事あんの。あの世さ行くまで頑張んねくてなんねえね(笑)。

地域に入り、地域に向き合うためには、誰かドアを開けてくれる人が要る。その人の眼を通すと、地域の全体や暮らしの細部がイメージできるようになる、そんな人。

高橋敏幸さんは、私にとってそういう人だった。敏幸さんと出会えたからこそ、鬼首というそれまで縁がなかった土地とのかかわりが持てたのだと思う。

初めてお会いしたのは大雪に見舞われた2006年2月のことで、『素ローカルなるこ0号』の取材のため約束の旧神滝温泉に向かうと、湯治部屋で敏幸さんが待っていてくださった。当時鬼首公民館長だった大山厚昭さんもいっしょだったせいか初対面同士の緊張はなく、敏幸さんはゆったりとした深い声で間を取りながら、雪下ろし、お膳づくり、猟、山仕事、農作業と、鬼首の暮らしの核心をつぎつぎと話してくれた。様子が目に浮かぶような話に聞き惚れた私は、辞去するときにはこの人のもとに通おうと決めていた。

その後、5月、9月と季節を追って訪ねた鬼首は、まるで違った相貌を見せた。長い冬のあとにくる芽吹きのは春は一瞬のうちに過ぎ、短い夏に米を育て、稲刈りがすんだら冬の備えが始まる。話を通し、1つの生業だけで暮らしは成り立たず、知恵と技術を活かしくつもの生業を組み合わせて暮らしてきたことを教えられた。

お茶を入れながら相槌を打つ妻の五十子さんが、主役となって語り出すこともあった。話にはいつもおかしみがあつて、聞いているこちらにも笑い出してしまう。壮絶ともいえるような生活の中でも、それを受け入れ笑っていたのが習い性になったのだろうか。ほどなくして、私は別の活動を通じて長男の一番さんとも知り合いになり、地元契約講が行う野火入れや、大森平の田植え前の仙北沢の保全作業にも加わらせてもらった。本書の写真は

そのときのものである。

敏幸さんは徴兵で仙台の部隊にいたときに仙台空襲を、五十子さんは女子挺身隊として東京にいたときに東京空襲を経験している。鬼首の話ではないが、人の移動という点でも、また空襲の体験としても貴重と考え、残すことにした。

敏幸さんは2015年に、五十子さんは2022年に、そしてそのあとを追うように一番さんが2023年に他界されたため、本書の内容について確認をいただくことはかなわなかった。不確かな点は地元の方におたずねしたが、もしあやまりがあつたらお許しいただきたい。3人からお聞かせいただいた話をようやく1冊にまとめることができ、いまは安堵している。『素ローカルなるこ』という従来の観光パンフレットを超えた内容の情報誌を16年にわたって発行し続け、その中から本を編むというアイデアを実現してくださった鳴子温泉郷観光協会の菊地英文さん、丁寧に校正してくださった同協会の高橋靖子さん、編集長の板垣幸寿さん、デザインをお引き受けくださった風の時編集部の小林美香さんに、心からお礼を申し上げます。

鬼首という地域のドアを開け放してくださった高橋敏幸さん、五十子さん、一番さんには感謝してもしつけない。敏幸さん、五十子さんは3月が誕生月とうかがっていたので、本書を99歳と95歳の誕生日の贈りものにいたします。ありがとうございました。

2025年3月

西大立目 祥子

『素ローカルなるこ文庫』について

鳴子温泉郷観光協会では平成18年（2006）から令和4年（2022）まで、情報誌『素ローカルなるこ』を発刊し、鳴子温泉地区内に全戸配布したほか、宮城県内を中心に東北各地の文化施設に寄贈をしてきました。『素ローカルなるこ』は地元の方々からお聞かせいただいた話をもとに制作したもので、16年の取材期間にお会いした方々は約200人に及びます。その誰もがぎびしい自然と向き合い、その恵みを楽しみ知恵と工夫を重ね、家族のために、地域のために奮闘していました。地域は人の手によってつくられていくことを、あらためて教えてくれるものでした。その中には、地域史にとって貴重な内容も多くあり、また次世代に伝えるべき人の物語もあります。そこで、取材班が特に残したいと感じた話を『素ローカルなるこ文庫』としてまとめ、公式ホームページで公開し、冊子として発刊することにいたしました。この鳴子の地に暮らしてきた方々の話が多くの方に伝えられ、地域への愛着を深め、将来を考えるための一助になることを心から願っています。

2025年3月

鳴子温泉郷観光協会

素ローカルなるこ文庫

鬼首 ― 山と暮らす日々

高橋敏幸さん・高橋五十子さん 聞き書き

編著者 西大立目 祥子（青空編集室）

デザイン 小林 美香（風の時編集部）

発行 2025年3月31日

発行者 鳴子温泉郷観光協会

〒989-6823 大崎市鳴子温泉湯元2-1

電話 0229-82-2102

メール info@naruko.gr.jp

無断複製・複写・転載を禁じます

Printed in Japan





鳴子温泉郷観光協会